

やまなし文学賞 青少年部門 青春賞

耳を壊して

星野 哲 作

あいつがいた。同じクラスの大嫌いなあいつ。

目が合った。最悪。お腹が半煮えみたい。ぐじゅぐじゅした感じ。

気のせいだって目をそらしてくれないかな。私はどうも動けそうにない。車に轢かれる小動物が固まるあんな感じ。

でも、知ってる。あいつはきつと話しかけてくる。だから嫌いなんだ。

大嫌いなあいつのこと、私はよくわかってるみたいで―あいつがこんな私にも行動が読めてしまうくらい単純なんだろうけど―あいつはこっちに歩いてきた。それで、遊び先でたまたま会ったみたいに手をあげた。

「あれ、どうしたん？　こんなところで」

あいつは――高橋は言った。

言い訳は10くらい用意してた。先生に見つかったときとか、警察に話しかけられたときとか、親から電話がかかってきたときとか、そんな想定を重く背負って玄関を出たのに。

「あ、え、や」

高橋に会う想定なんてしてなかったんだ。言い訳の準備なんてないよバカ。

「あー、あれ？　家出的な？」

「あー、うん。そうそう。そんな感じ？」

違う。これは家出なんかじゃない、はずだ。じゃあ何って聞かれても答えられる気はしないけど。高橋にはそういう風に見えてるんだろうか。

「モラトリウムっすか」

かちんとする。気軽に人の地雷を踏んでくる。ほんと高橋のこういうところが嫌いだ。

「そーだよ。モラトリウムだよ。だからほっといて。もう帰るし」

言ったそばから背筋が凍る。私は高橋が嫌いだけど、みんなは割と高橋のことが好きだ。しかも高橋は同じような声が大きい奴らと仲が良い。高橋がクラスで「こいつ、めっちゃ態度悪かった」なんて言ってみろ。私は村八分、爪弾き、上履きには画びようを入れられ、机には花瓶が置かれ―なんてことは昔のドラマでもないし、されないんだろうけど。私の見てきたいじめはもっと冷たくて乾いてる。

「あ、ごめん言い過ぎた！　ちょっと嫌なことあってさ。ほんと……ごめん」

なんで私、嫌いな奴にイヤなこと言われて謝ってるんだろ。すごい泣きそうだ。

「え、なんで謝ってるん？」

ほんと徹頭徹尾、頭から爪先までこいつは高橋だ。けど、今は高橋だから助かった。

「よくわからんけどさ、帰んなら途中まで送るよ」

「え、や、いいよ。悪いし。一人で大丈夫」

街灯に映る高橋の影が揺れて、伸びる。高橋が向こうを指してた。

「そろそろさ、近くのクラブが閉まるんよ。そんで帰る女の子狙ってるのがそろそろ出てくる」

高橋の指さす通りには、たしかにスマホに目を落とした男の人たちが点々と立ってた。

「詳しいんだね」

「詳しいんよ、俺」

お前もその一人なんじゃないかって皮肉に高橋は気づかず、得意げだ。

「大丈夫。私、ナンパされるほど顔よくないし」

「あいつら、女ならなんでもいいんよ」

失礼なやつ。私はなんでもか。

「俺もバイト終わって帰るところだから」

これ以上、断ったらだめだ。遠慮じゃないってバレル。

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

高橋は笑った。私は泣きたかった。なんでこうも私は上手^{うま}くないんだろう。

ああ、きつと、それも、これも、どれも全部、高橋のせいだ。

かえってきたテストに12万円の成果は出てなかった。今まで知ってたことと、新しく学んだことがごっちゃになって、かえって点数は下がってた。

「ねえ、みてこれ。やばくない？」

同じ夏期講習に参加してた友達がやばい答案用紙を見せてきた。

「やばいね」

自分よりも12点高い答案に、私はそう言うしかなかった。

その子が答案用紙片手にほかの子のところに行ったあと、私はイヤホンをつけた。机に伏

せてしまえば、だれも話しかけてこなかった。

家に帰れば聞こえるのは「おかえり」じゃなくて、兄の怒声で。今日も今日とて、画面の向こうの誰とも知らない人に怒鳴ってる。「無能」とか「引きこもり」とか「社会不適合者」とか、聞こえてくる罵倒は全部、暗い部屋の自分にむけて言ってるみたいだ。

うがいして、手洗いして、制服を着替えて、私の部屋に入る。机に開きっぱなしだった公民の参考書を手に取ろうとしたとき、隣の部屋から重い音が聞こえた。

「だからさあ！ マジで頭悪いなお前！^{まえ} 何回やってもわからないんだからもう止めろよゴミ！」

思わず、私と兄の境界の薄い壁を殴りそうになる。べつにそれくらいやっていいはずだ。

私は受験生で、兄はニートだ。私がしているのは勉強で、兄がしているのはゲームだ。誰も私のことを咎めたりなんかできない。^{とが}

でも、しない。兄と喧嘩^{けんか}するのが嫌なんじゃない。喧嘩したあと、静かになる部屋が嫌だった。ただでさえ顔も見ないのに、その声が聞こえなくなったら生きてるのか死んでるのかもわからなくなる。

私はイヤホンをする。ノイキャンは壊れてしまってるから、兄の声が聞こえないくらい音量を上げる。

「なんでアンタはいつもそうなの!？」

母はいつもそこがなにかの舞台かのような声で父を怒る。親の喧嘩で起きるときの心地はいつも最悪だった。

「あの子は大事な時期なのよ！ アンタがそんなんでどうすんの!!」

こういうとき、いつも父は無言だった。父が無言でいるほど母の声は大きくなる。

夫婦喧嘩しているときの2人の顔は見たことないけど、布団のなかで目を瞑ると2人の顔が浮かんでくる。涙を流さんばかりに顔を紅潮させてる母と、拗^すねたように目をそらす父。一度目が覚めてしまえば、喧嘩が終わるまで眠れない。

枕元を探ればイヤホンがある。子守歌にはならないけど、自分の手で耳をふさぐよりはずつとマシだった。

水曜日は図書館の閉館時間が遅いから、そこで勉強をするようにしてた。家にいるよりずつと静かではかどるんだけど、今日はどうもダメだ。昨日、あんまり眠れなかったから、静かさが心地よく睡魔を招いてくる。

「そーなんよ、そんでそのあとホテル行つてさ!」

睡魔を追い払ったのはバカのバカでかい声。高橋だ。高橋ともう一人よく一緒にいる違うクラスの奴。ご親切に私の真後ろでお喋りしゃべをはじめた。

「マジ!? 高橋お前、小野塚とヤツたん!」

「いえーい」

「はあ!? うっわ、マジかよ。めっちゃいいな」

「紹介したるか? わりと誰でもいいみたいよ」

こいつらは「図書館では静かにしましょう」って義務教育で学ばなかったのだろうか。学ばなかったんだろうな。まあ、いいさ。今はそうやってでかい顔してればいい。もう一人の方は知らないけど、高橋はバカだ。成績もドべだつてべつに聞きたくもないことをこの前でかい声で話してた。

こいつらの全盛期はいまだ。こっからは下降線。私みたいにコツコツ勉強してる奴が、いい大学に入って、いい会社に入って、最後は報われるんだ。

そんな奴らのために、逃げるように席を移動する気はない。不快なうるささには慣れてるんだ。

バッグを開いてイヤホンを探る。けど、なかなか見つからない。10回に1回くらいある行方不明だ。

「あれ? そういやなんで図書館に来たんだっけ?」

「さっき言ったやん。俺さ、推薦貫もろつたのよ。ほんで作文みたいな書かんといかんから、広瀬が図書館でそーいう本借りて勉強しろってさ」

は。高橋に推薦出すって。どんな大学だ。あ。イヤホンあった。

「はははは! お前に推薦出すってどこの大学だよ!」

「お前、マジ笑えんからな」

高橋が言ったのは聞き間違いじゃなければ、私の第一志望大学だった。

「はあ!?　なんでお前が!?　めっちゃバカなのに!」

「ふふん。世の中、勉強がすべてじゃないのよ」

私はイヤホンをした。めいっばい音量を上げた。高橋の声は聞こえないはずなのに、高橋の声が消えない。

「痛っ……!」

音量を限界まで上げたとき、耳の中に痛みが走った。イヤホンに血がついてた。

「ああ、そんなことがあったのね」

本当に私はなにしてるんだろう。大嫌いな奴にこんな話して。誰にでもいいからぶちまけたいって気持ちはあったけど、よりにもよって高橋とは。いやでも高橋だからなのかな。

「みんな苦労してんのな」

私の渾身の不幸自慢はその一言で片づけられた。

「俺もさ、毎日大変よ。こないだ親父が自殺して、母ちゃん鬱になっちゃってさ。しかも親父バカみたいな借金してたらしくて、毎日電話が鳴りやまんのよね」

足が止まる。高橋の告白に私が想ったのは同情とかじゃなかった。

「でも、いいじゃん。高橋はいい大学行けるんだし」

我ながらどうかと思うけど、困ったことに本音だった。

「大学行かんことにした。家、こんなだから」

ほんと、私は高橋のことが大嫌いだ。行けよ、大学。そしたら、ちょっとは好きになれたのに。

「みんな大変だからさ、俺も弱音吐いてられんよ」

ああ、そう。じゃあ、高橋より不幸じゃない私が今さっき弱音吐いたこと、謝らないとね。

ふざけんな。なんだそれ。恵まれてる高橋なら、私は可哀想でいられると思ったのに、なんでお前は不幸にすら恵まれてるんだよ。

知ってるよ、私のこんな不幸なんてただの思春期のモラトリアムの6文字で片づけられ

る気持ちだつて。世の中には高橋みたいに、私よりもずっと不幸で可哀想な人がいる。私のちんけな不幸自慢には、もっと大きな不幸自慢が返ってくるって知ってた。そしたら、私は自分を可哀想とすら思えなくなる。だから、胸の内にため込んで悲劇のヒロインぶってたのにさ。あーあ。本当の悲劇のヒーローは目の前にいましたか。

「じゃあ、私はどうしたらいいの？」

弱い私はちよつとしたことでめげそうな毎日だ。嫌いなユーチューバーがバズったり、信号にことごとくつかまったり、応援していたチームが負けたり。そんなことで泣きそうになる。

やってられない。役をとられた明日から私はただの性格の悪い根性なしだ。

「気にしすぎなんよ。だからあれだ。耳を壊せばいいんだよ。なんも気にならなくなるようにさ」

「冗談」って高橋は笑ったけど、今まで聞いた高橋の言葉で一番イケてた。

「実際、どうにもならんと思う。俺は諦めてるよ。ずっとこの調子なんだろうなあって」

吸う息が冷たかった。吐いた息は咳せきになって、その拍子に涙が出た。

「そっかあ。どうにもならないかあ」

高橋は高橋のまま。私はこんな弱くて性格の悪い私のまま。どうにもならない。

涙は拭ったそばから溢あふれる。高橋がおどおどしてるのがらしくなくていい気味だ。もっと泣いてやろうかと思っただけ、そう思った矢先に涙は打ち止め。私らしいか。

「さっきの続き。どうにもならんと思うけど、だからロックンロールがあるんだぜ」

慰めてるのかと思っただけ、どっちかといえば自分のしている話に酔っているみたいだった。そういえば、高橋ってバンドやってるんだっけ。

「ロックは悩みを解決するためにあるんじゃない。悩みを持ったまま踊るためにあるんだ」
たぶん、有名人の名言を真似まねたんだろう。服に着られてるみたいな感じで全然かつこよくない。だったら、さっきのセリフの方がかつこよかった。

「もうちょいモラトリウムしようぜ」

そう言つて高橋はさっき来た道の方を見た。ダサいし、決まってないし、うざい。けど高橋っぽいから、私は頷うなずいた。

歩いているうちに冷静になってドキドキしてきた。こんな時間に男女が2人。この流れってそういうこと？ モラトリアムってそういうこと？

「言っとくけど、そーいうことはしないから。安心して」

安心と怒りが4対6だ。小野塚さんともこんな感じでしたのかと思ってた。

クリスマスみたいに光るネオンは中心街を深く潜れば潜るほどガラガラしてきた。昼間は寂れた通りはどうやら夜行性だったらしい。

スーツを着た人たちも怖いし、警察も怖い。唯一怖くない高橋は前を歩いたまま、ぜんぜん振り返らない。高橋への怒りを原動力に足を進ませていると、ようやく目的地についたらしく高橋が足を止めた。

「こっち。暗いから気を付けて」

高橋は店と店の間にある謎の扉を開けた。短い廊下を歩いた先に階段があって、それを下に降りていく。高橋の言う通り電気はあるけど、頼りない明るさだった。階段なんて闇に向かって延びているようにしか見えない。引き返したかったけど、一人で帰るのも怖いし、だからといって怖いから帰りたいなんて高橋に言いたくなかった。ええい、ままよ。と階段を降りる。

闇の先には放送室みたいな分厚い扉があった。高橋はどこから取り出した鍵でそれを開ける。

「俺、ここでバイトしてんのよ」

なぜその説明をもっと早い段階でしてくれなかったのか。まあ、聞かない私も私だ。

扉の先はそれこそ本当に真っ暗闇だった。映画館みたいなにおいがした。けど、音の返り方とかでなんとなく映画館じゃないのはわかる。「ちょい待って」と高橋はスマホのライトをつけて、どこかへ行った。

ほどなくしてじんわりと明かりがついた。明るくなってすぐにここがライブハウスだってわかったのはステージに鎮座するドラムと高橋がバンドやってるっていう前情報があったから。

明かりがついてしばらくしても高橋は現れなかった。帰った？って疑うくらい時間がたってから、ステージ袖からギターを提げた高橋が出てきた。スタンドマイクも一緒に運んできてる。

「マジ？」

私の声は高橋には届いてなかった。もくもくと機材をいじってる。

「あ、あー」

高橋がマイクに向かって声を出すと、ハウリングがした。耳に響いて痛い。ギターが鳴ると頭が割れそうだった。

は、と息を呑む音が聞こえた。高橋がピックを持った腕を振り上げた。待つて、っていう私の声は音の爆発に呑み込まれた。

高橋のそれは上手下手の線上面にも乗っていない。ただの絶叫だった。耳をふさいでないとどうかしてしまいそうな不協和音。冗談じゃない。耳が壊れそうだ。

やめろ。へたくそ。バカ。叫んだ声は私にも聞こえない。なんか泣けてくる。声の大きさはそのまま、私たちが抱えてる不幸の大きさみたいだ。

高橋はそんなに叫ばないとやってられないくらい辛いんだ。

私はそこまでじゃない。ただ、ちょっと耳を塞ぎたいくらいで。

あーもー、なんか急にぜんぶどうでもよくなってきた。

私は耳を塞いでいた手を外した。

ねえ、高橋。

私さ、もう何も聞きたくないよ。

お兄ちゃんの怒鳴り声も、ママの泣き声も、友達の笑い声も、

高橋の叫び声もさ。

でも、一番聞きたくないのは自分の声なんだ。

「だから、耳を壊して」

明日があることはわかった。この夜が自分を変えないことも、耳が壊れてくれないこともわかった。そんなどうしようもない現実には私は踊った。ロックンロールも悪くない。